

第1回 マチごとゼロカーボン市民会議 会議録

■ 日時・場所

日時：2022年8月21日（日）13:00～17:00

場所：所沢市役所 市庁舎高層棟8階大会議室（専門家の江守氏はオンライン参加）

■ 出席者

参加者：40名（欠席9名/早退1名）

専門家：江守正多氏（国立環境研究所）、小出瑠氏（同）

司会（全体ファシリテーター）：平塚基志氏（早稲田大学）

グループファシリテーター：所沢市職員

グループサブファシリテーター：早稲田大学学生

■ プログラム

13:00	20分	開会 藤本市長よりご挨拶 所沢市より趣旨説明	
13:20	15分	チェックイン	グループ内で他己紹介
13:35	35分	「所沢市の好きなところ・魅力 だと思ふところ」を話し合おう	グループをまたいで“所沢”を考える
14:10	10分	休憩	
14:20	55分	情報提供1 江守正多氏より	「気候変動の現状と脱炭素の必要性」 質疑応答
15:15	10分	情報提供2 所沢市より	「ゼロカーボンシティ実現に向けた所沢 市の現状」
15:25	20分	情報提供3 小出瑠氏より	「カーボンフットプリントからみた所沢 市の脱炭素型ライフスタイル」
15:45	10分	休憩	
15:55	60分	グループワーク	「ゼロカーボンを実現するために普段の 生活で取り組んだ方がよいこと」
16:55	5分	チェックアウト・閉会	連絡事項など

■ 配布資料

- 資料1 マチごとゼロカーボン市民会議の進め方及び参考資料
- 資料2 第1回マチごとゼロカーボン市民会議 タイムテーブル
- 資料3 マチごとゼロカーボン市民会議 趣旨・目的説明
- 資料4 情報提供1 気候変動の現状と脱炭素の必要性
- 資料5 情報提供2 ゼロカーボンシティ実現に向けた所沢市の現状
- 資料6 情報提供3 カーボンフットプリントからみた所沢市の脱炭素型ライフスタイル
- 資料7 第1回マチごとゼロカーボン市民会議 アンケート票
- 資料8 所沢市マチごとエコタウン推進計画 概要版

■ 記録

1 開会・市長挨拶・趣旨説明

はじめに、藤本市長による開会挨拶を行った。続いて、マチごとエコタウン推進課より会議の趣旨、目的及び会議の構成や進め方等の説明を行った（資料3）。

2 チェックイン（他己紹介）

まず各グループ内で2人1組になり、4つ折りにした用紙に「①ニックネーム、②所沢在住歴、③最近のマイブーム、④（市民会議の）招待状が届いてどう感じたか」の4点を書き込んでパートナーに自己紹介し、次にグループ内で相互にパートナーを紹介した。

3 “所沢”を考える

参加者間の交流とグループワークの練習を兼ねて、「所沢市の好きなところ・魅力だと思うところ」をテーマとしたグループ討議を①各グループでの意見出し、②グループを移動しての情報交換、③元のグループでの意見共有の3つのステップの順で行い、最後に2つのグループから全体へ向けた発表を行った。

4 情報提供1 江守正多氏

気候変動の現状と脱炭素の必要性をテーマとして、国立環境研究所の江守正多氏より情報提供が行われた（資料4）。

初めに、地球温暖化の要因と、CO₂の濃度の変化やその他の温室効果ガスの排出状況について解説し、次いで国際社会の約束として、パリ協定での目標について説明された。そして、地球温暖化の影響や被害の見込みを示し、温暖化の影響はCO₂を大量に排出してきた先進国よりも、発展途上国や将来世代により深刻な被害をもたらすという状況を解説された。最後に、世界のエネルギーは再生可能エネルギーを急激に伸ばし、化石エネルギーを削減していく必要があること、日本の排出削減目標は個人の我慢では達成ができないことを示し、脱炭素化の実現のためには社会の大転換が起きる必要があることを訴えた。

江守氏からの情報提供の後、質疑応答の時間を設けた。なお、この時間は各グループ1問のみとしたが、それ以外に出た質問についても会議終了後に取りまとめ、江守氏に回答を依頼した。

当日の質疑応答の時間で出された質問及び回答の要旨は以下のとおりである。

- Q1. 温暖化が進んだ時の最悪のシナリオにおける所沢市での具体的な影響は。
- A1. 最悪シナリオでは世界で気温が平均5°C上昇する。所沢市に限らず基本的にはどこであろうが高温による健康被害が増え、強い台風や豪雨により被害が大きくなるだろう。
- Q2. (資料4の) p14の排出量はなぜ2013年を機に減ったのか。
- A2. 再生可能エネルギー、特に太陽光発電の増加と、いくつかの原発の再稼働による。
- Q3. 世界ではなぜ温暖化対策が生活の質を高めると捉えているのか。(2グループが同趣旨)
- A3. 世界では日本より温暖化リスクを深刻に捉えているため、対策で温暖化が抑えられること自体を(生活の質を高めるとして)重視している可能性がある。また、再生可能エネルギーの増加によるエネルギー自給率向上、地域での経済循環、雇用の発生、非常時の電源確保、大気汚染物質の排出抑制のほか、断熱性能の高い住宅の増加等、よい側面に目を向けているかもしれない。
- Q4. どのように再エネの転換をバランスよく行っていくのがよいか。その課題は何か。
- A4. これまでは制度設計の問題もあり、メガソーラーによる森林破壊などの乱開発を許してしまったという課題があった。今後は、地元の合意を取り、地域にメリットがある形での設置を増やしていくことが大切(農地のソーラーシェアや耕作放棄地、屋根上への設置など)。廃棄に関しては、回収・リサイクルの情報を発信し、きちんと実施していく方向にある。
- Q5. (資料4の) p16の「社会の大転換」では混乱も伴うのではないか。CO₂削減以外に重視すべき軸(例えば景気や過ごしやすさなど)は何か。
- A5. 技術が入れ替わる際に社会として別の問題が発生する点に着目することは大切で、格差や公平性を考える必要がある(脱炭素化によりなくなる仕事に従事していた人が新しい仕事に就けること、電気代などが上がった時に低所得者への配慮を行うことなど)。また、国際社会の秩序を保ちながら世界が脱炭素していくことが重要である。
- Q6. CO₂の吸収に関して私たちができることは何か。
- A6. 吸収の手段の一つは植林である。将来的には工学的に大気から吸収し地中に埋めることも考えられているが、現状では植林事業への参加などが考えられる。なお脱炭素は「CO₂の削減か吸収か」だけでなく、「エネルギー消費の削減・CO₂が出ないエネルギーへの転換・吸収」を組み合わせ実現するものである。また削減も、我慢による削減ではなく、家の高断熱化や電化製品の効率化等により削減するイメージである。
- Q7. 化石燃料に替わるエネルギーとしてベストなものは何か。原子力発電はどうか。
- A7. 基本的には太陽光と風力が多くを賄う。これらは今後どんどん安くなっていく。一部原子力はあると思うが、原発の新設はコストが高い。再生可能エネルギーの発電量は変動するので、どのように需要とバランスさせていくかがエネルギー転換のカギとなる。

5 情報提供2 所沢市

ゼロカーボンシティ実現に向けた所沢市の現状について、マチごとエコタウン推進課より情報提供を行った（資料5）。これまでの市の政策とゼロカーボンシティ達成の道筋や所沢市域の二酸化炭素の排出状況を解説し、市内の再エネ施設と地域還元の仕組みや、地域新電力事業（ところざわ未来電力）の現状を紹介した。

6 情報提供3 小出瑠氏

カーボンフットプリント（CFP：製品やサービスの原料調達から製造、運搬、販売、廃棄までのすべての段階におけるCO₂等の温室効果ガス排出量）からみた所沢市の脱炭素型ライフスタイルをテーマとして、国立環境研究所の小出瑠氏より情報提供が行われた（資料6）。

初めに日本のCFPとセクター別排出量の概要が示され、次いで埼玉県内の平均的な例としてさいたま市のデータを用いて解説された。さらに、脱炭素型ライフスタイルの4つのアプローチとその選択肢の例を挙げ、削減効果が大きい脱炭素アクションのイメージを「住居、移動、食、消費財・レジャー」の4分類で具体的に示された。最後に、市民の脱炭素アクションを広げていくためには、地域の様々な主体による環境整備が必要で、そのためには行政・自治体の取組が重要であることが示された。

7 グループワーク

情報提供を受けて、グループごとに「ゼロカーボンを実現するために普段の生活で取り組んだ方がよいこと」をテーマとする意見交換を行った。グループワークは付箋紙と模造紙を使用して行い、①個人ワーク、②グループ内でのシェア、③アイデアの整理とグルーピングの順で進めた。

この結果は、ワークで使用した模造紙を用いて全体に共有された。

8 講評

グループワークの結果発表を受け、小出氏による講評が行われた。要旨は以下のとおりである。

- ・発表では色々な側面が網羅されていた。個人単位での取り組みや普及啓発だけでなく、設備導入の促進やモノのシェアリングなど、社会システムを変えるという視点が入っていた。こうした観点を取り入れていくことがゼロカーボンの実現に繋がる。
- ・市全体や社会全体で取り組みが普及するためには、それぞれが取り組むメリットが必要な場合や、無意識的にできた方がよい場合、あるいは自覚的にやらないといけない場合などがある。自分の家族や職場や学校を思い浮かべ、皆が無理なく脱炭素に取り組める方法を考えられたらよい。
- ・取組の優先順位も重要である。2050年脱炭素を考える際、所沢市の状況を踏まえ、そもそものように生活の質やニーズを脱炭素で満たしていくことができるか、様々な手段を考えていく必要がある。電気自動車（EV）を例にとれば、EVの購入だけでなく、自転車の利用、テレワーク、EVのシェアリングなどを検討することが考えられる。
- ・日本ではCFPが表示されていることが少ない。表示を目にして考えることで行動が変わり、世の中をどうしていくか議論する場面ができる。所沢市で先進的な取組が始まるとよい。

9 次回以降のテーマ

グループワークの発表の内容に基づき、司会の平塚氏より、次回以降の会議で取り上げるテーマの案として以下を示した。

「太陽光発電等（再エネ）」 「省エネ家電・住宅（住まい）」 「公共交通機関の利用（移動）」
「消費・廃棄・農作物の工夫（消費・食・農）」 「カーシェア・ライドシェア（地域での連携）」 「その他/里山の利用・普及啓発等」

参加者からは特に追加や異論はなく、この案を踏まえて次回以降のテーマを主催者側で整理して準備を進めることが了解された。

10 チェックアウト・クロージング

本日の締めくくりとして、グループ内で1人1言の感想を共有した。クロージングでは、次回に向けた事務連絡のほか参加者アンケートを実施した。

11 閉会

以上